探究学習のススメ

―見方・考え方を働かせる協働的な学びが生徒を自走させる―

愛知県立安城高等学校　稲吉 徹（いなよし・とおる）

―使用教材―
『高等学校 公共』

1 私が探究学習に振り切れたきっかけ

私はどの科目を担当するときでも年間を通して、１時間教壇に立って教えるというスタイルによらず、基本的に生徒が「調べて→まとめて→発表する」を繰り返す、いわばオール AL（アクティブ・ラーニング）の手法をとっている。すると、校内でも「教科書は終わるのか？」「受験に対応できるのか？」等、心配の声があがることもある。もちろん課題は多々あるが、AL 型に徹することで定期考査や受験において特段深刻な局面を招いたことはないし、日常の授業の中で学習評価の工夫・改善が求められ、思考力や読解力等を試す入試問題へとシフトしている状況では、むしろ時代の要請にコミットできているという自負もある。

2020 年春、新型コロナウイルス感染症への配慮から愛知県でも２か月間の休校を強いられた。本校でも、普通教科のみならず家庭科や美術科まで積極的なオンライン授業の配信に力を注いだ。だが、生徒はいとも簡単に、私たちが制作した動画よりもはるかにクオリティの高い授業動画をネットから見つけ出す。やがて教室に生徒が戻ってくると、教師が一方的にレクチャーをする授業スタイルへの違和感に気付かされた。コロナ感染症によって幸か不幸か、ネット動画ではできない学びとは何か？、同じ空間にわざわざ生徒が集うことでしかできない学びとは何か？に対する答えを迫られ、学校教師の存在意義にさえ焦りを感じることとなった。

2 なぜ、探究学習が求められるか？

「公共」の学習を計画するうえでの改善・充実の要点は

①「人間と社会の在り方についての見方・考え方」を働かせ、考察、構想する学習を重視すること
②現実社会の諸課題から「主題」や「問い」を設定し、追究したり探究したりする学習の展開
③社会に参画する際に選択・判断するための手掛かりとなる概念や理論及び公共的な空間における基本的原理の習得
④自立した主体として社会に参画するために必要な資質・能力を育成する内容構成
※『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 公民編』（以下『解説』）p.16-17 より。

であり、上記を概観しても、探究学習を扱わない理由がない。特に、公民科の指導計画を作成するにあたっては、

1 内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにする
2 社会との関わりを意識した課題を追究したり解決したりする活動を通して社会の変化に主体的に対応できる力を養うようにする
※『解説』p.160-161より。

ことが留意されるべきである。

とすると、「何となく教科書に沿って進め、時期が来れば定期試験を行い、まるで試験前の一時的な暗記力の勝負であるかのような学習指導」から脱却して、「１学期はここまでできるようになってほしい。その力を身につけるためには、講義だけでなく協働的な活動も必要」といった「指導の見通しを持つこと」が教師には求められる。ここで、「探究に時間を割いていたら、教科書の基本事項が網羅できないではないか」と聞かれることがあるが、教科書の重要語句をすべて解説しようという発想に無理がある。授業で扱う内容、生徒の自学自習に頼る部分といった思い切った精選がやはり不可欠だろう。そして従来は「まずは知識を定着させたうえで考察させたり、表現させたりする」という前提に立っていたが、現行の学習指導要領によれば、

1 社会的事象等について考察する中で「知識及び技能」は習得できる
2 社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想する中で、「学びに向かう力、人間性等」が涵養される
※『解説』p.9より（赤字は筆者）。

というスタンスに立ち、考察・構想する過程においても知識・技能は習得でき、主体的に取り組む態度も育成できるとしている。とすれば、探究学習を中心に授業を展開しても、知識・技能の習得を邪魔することにはならないし、思考力・表現力を高めるだけでなく、生徒の学びを主体的なものに変える可能性がある。

もう１点。私は、校内で探究学習やキャリア教育を推進する際に、主体性や思考力を伸ばしたいと目標設定するならば、それを訓練する時間を教育活動の中に織り込まないのは問題だと考えていた。ふだんの授業で“一方的に与える指導”に終始しておきながら「自分で考えて行動しなさい」と言っても生徒にとってはなかなか難しい。みずから考える力が大事と旗を振るならば、それを育む時間を学校時間の中に保証しなければならない。探究学習の学びが公民科、また「公共」の目標を具現化し、実社会で生きて働く資質・能力を高める最も効果的な場面になりうる。

3 大項目Ｃを見すえた授業計画

時々、探究のページについて「重要語句も載ってないので扱わない」という話を耳にする。それはいわば、種まきをしたのに収穫作業をしないような中途半端な仕上げを宣言するようなもので、そもそも「公共」では、小中学校の生活科や社会科で学んだ資質・能力を下敷きにしながら、大項目Ａで身につけた**「選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本原理を活用」**し、**「大項目Ｂで扱った課題などへ関心を一層高める」**指導の下に、**「この科目のまとめとして」**大項目Ｃを扱うこととなっている。誤解を恐れずにいえば、大項目Ｃで社会的な見方・考え方を総合的に働かせ、探究できるように大項目Ａ・Ｂを学ばせてきたはずである。

大項目Ｃは、**「公共」の各領域を横断する、あるいは科目や教科をも超えた課題を見いだし、その解決に向けて事実を基に協働して考察、構想し、論拠を基に自分の考えを説明、論述することを通して、社会に関わろうとする姿勢や人間としての在り方生き方についての自覚などを涵養する**ことを目標にする。『高等学校 公共』（以下、教科書）p.202 ～に、「課題探究学習の手引き」として探究の仕方や学び方の例が紹介されているが、具体的な何かを教え込む単元ではないことは一目瞭然だ。〈何を学ばせるか〉よりも、〈どのように学ばせるか〉に軸足を置く、自由度の高い授業設計が可能となっている。

例えば、年度の最後の定期考査が終わったあとの時間を大項目Ｃにあてる（次項 4 参照）ならば、探究で必要となるであろう概念や社会的な見方・考え方をそれまでに身につけさせる。もっとも、いきなり探究とはいかないから、１・２学期でプレ探究を散りばめておく必要もあろう。１年間の指導計画を逆算でとらえたとき、内容のまとまりごとの「軽重」を検討できるし、それぞれの時期における適切な学習支援・学習評価がより鮮明に見えてきて、メリハリのある１年間の流れができあがる。

そして、「公共」は地理歴史科目とも関係が深い。例えば「地理総合」は端的にいって「持続可能な社会づくりを担う科目」であり、「地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付け」る見方・考え方を、「歴史総合」なら「時期、推移などに着目してとらえ、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付け」る見方・考え方を養う。それらは、「公共」が目指す「人間と社会の在り方についての見方・考え方」と通底している。だからこそ、他科目で学んだ「見方･考え方」を働かせたり、「公共」で身につけたそれを他科目で活用したりすれば相互補完的な収穫が大きくなる。大胆にいえば、地理歴史科目の探究学習の中でも、「公共」の「幸福、正義、公正」の視点は鍛えられていく。

4 生徒を自走させる仕掛け

仮に、年間最後の８時間を使って、思い切って探究学習に取り組んでみると想定しよう。

１時間目　グループ編成とテーマ決め

まず、探究学習のねらいや授業の流れを確認することから始める。探究学習に取り組むねらいは何か、必ず共通認識を持つようにする。特に、**生徒の探究学習において最も難しく、気を遣わなければならないのが「テーマ設定」**だ。逆にいうと、テーマ設定さえうまくいけば、次回からの調べ学習も発表活動も期待どおりの成果に到達することが多い。教科書 p.204 ～のアクティビティを参考にして≪**「公共」でこれまで習ってきたテーマのうち、深く追究したいことを２枚のカードに書こう**≫と投げかける。ここでの記入は**できるだけ具体的に書く**ように強調する。テーマ設定のカギは**「具体性（分かりやすさ）」**だ。「日本経済の将来について」や「個人情報をどうすれば守れるか？」等は抽象的すぎて、調べ学習でもつまずくし、発表も当たりさわりのない内容になりがちである。「10 年後の景気はよくなっているか？」や「学校に防犯カメラを設置することの是非」といった自分事のテーマが望ましい。

似たようなカードを書いた生徒どうしでペアを組ませる、あるいは、数人の班を編成するのもよいし、個人で探究させてもよい。

2・3・4時間目　調べ学習・発表準備

テーマが上手に設定できれば、生徒は**「自走」する**。行き詰まっている生徒には声をかけるが、多くの生徒は難しい用語なども自分で検索して解決するし、データ収集も上手で、大人顔負けの発表スライドも制作する。準備段階で念押しすべきは「発表時間」だ。例えば、５分の制限を設けても多くの場合超過する。なぜなら、生徒は“活用できる多くの情報”からの取捨選択が苦手なことが多いからだ。これは私の経験から、生徒が何度か失敗を経験しないとスムースにいかない。そのため１・２学期でもプレ探究の場面があるとなおよい。

5・6・7時間目　成果発表

中学校までの素地があるので、人前で発表することに生徒は慣れている。他の発表に対して相互評価させたり、順番にコメントさせたりするのもおもしろい。教師としては「努力できた点」を褒めながらも、「こうするともっとよくなる点」を指摘するようにしている。

8時間目　振り返り

今回の探究学習の振り返りをタブレット等で入力して提出、あるいは全体でシェアする。このとき、**「探究学習の前と後で自分自身にどんな変化があったか」**や**「他のテーマとのつながり」**、**「次に深めたいこと」**などを意識させて記述させると効果的だ。探究学習で自分の視野が広がったという感覚を持てたり、さらなる課題へと意欲が高まったりしていけば、**次の学びに向かって生徒は「自走」するようになる**。

大項目Ｃでは**「生徒自らが探究する課題を見いだすことが大切」**だが、ふさわしい問いを立てるのは簡単ではない。そこで教科書 p.212 ～の「少子高齢社会の医療」といったフレームを示し、その中で特に関心の高い題材（「高額医療も公的保険を適用すべきか？」「救急車利用は有料にすべきか？」など）を考えさせる手法もある。

このとき、問いの設定で留意したいのが、多くのテーマにおいて、その論点はネット上に大抵整理されていることである。

例えば、東京都のバランスシートには、救急車が１回出動すると 4.5 万円程度の税金が使われることや、救急車を有料化利用とした場合のメリット・デメリットが掲載されている。生徒の探究が、そのコピペだけで終わらないようにする工夫も必要だ。具体的には、「適正利用に限定するための提案」といった生徒独自の考察を盛り込むように指示をする。また、テーマが決めきれない生徒に対して、教科書等を手がかりに検討させることは一助となるが、教科書に載っている設問に答えるだけでは探究というより、通常の考察に留まるので、やはり問いをみずから立て、課題を見いだし、それを追究する探究を基本線にできるとよいだろう。

5 探究学習は学び続ける姿勢や大学入試にもつながる

大学入学共通テスト、大学入試センター試験の問題でも、思考力や読解力を試す良問は数多く見られた。知識の単純なアウトプットを重視していないのは明らかで、検索すれば情報がいくらでも拾い出せるこの時代、“より多く暗記した者の勝ち”が通用しなくなったことが現場の空気感を変えようとしている。多くの資料の中から必要な情報を正確に読み取ったり、考え方を転用させて具体的事象をとらえさせたりする設問へのトレーニングが、探究学習でできると私は考えている。例えば、問題文に文献の一部や理論が載っていて、それを用いて現実社会をとらえさせるパタン。複数の資料から考え方等を読み取り、それを用いて具体事例を選択するパタン。公民科やそれ以外の科目等を横断して身につけた知識や技能を活用して社会的課題をつかみ取るパタン…これらは、理論・根拠を基に、まだ知らないところにも焦点を当て、社会的事象には何らかの因果関係があるのではないかとか、事象Ｘと事象Ｙの関連に共通項が見つかるのではないかといった思考力を試している。こうした問題を解くのに必要となる読み取る力や推測する力は、まさに課題探究のプロセスの中で育成できる。みずから問いを立て、仮説や見通しを持って考察し、主題を解決しようという営みを繰り返すなかで、生徒はその経験値を上げることができる。

授業は受験のために行うものではないが、読解力や思考力が入試においても重要視されているという時代のメッセージをくみ取れば、授業の中でその資質・能力を高めていくのは方向性として間違っていない。探究学習にしっかり取り組むことは、今の入試に備えることでもあり、さらに進路意識の高揚や主権者意識の涵養はもちろん、地理や歴史、数学や情報科など他教科をも巻き込んで社会との関わりを実感できる学びにつなげることができるだけでなく、カリキュラム・マネジメントにおいても大変有効な手だてになるだろう。

6 探究学習をどのように評価するか？

授業で使用する私のワークシートには、必ず**「授業のねらい」**や**「どこを評価するか？（何ができるようになってほしいか）」**を明示している。生徒にとっては、目指

すゴールを把握してから準備や発表を進めるため、教師にとっては評価規準を見える化して達成ラインを事前に共有するためである。全員が目標に到達すれば全員Ａでもよい。「おおむね満足できるＢライン」に達していない生徒がいれば、支援や配慮が必要になるし、授業計画の軌道修正も迫られるだろう。ある授業で、次のような場合に「十分満足できるＡ」を与えることがあった。

・住んでいるまちの画像を生徒が自主的に放課後に撮影に行き、親や他の先生のインタビューと合わせて発表できた
・生徒作成の発表スライドにアニメーションや効果音を付けて、新旧比較を動画形式で紹介する工夫ができた

例えば、授業計画の段階で想定していた以上の取り組みに対しては「十分満足できるＡ」としている。『参考資料』＊p.74 にあるように、探究学習で「知識・技能」を見取ることはしない。一方、「主体的に学習に取り組む態度」を見取る場面が多いのは探究学習の魅力である。

探究学習においてはルーブリックやパフォーマンス評価が有用だが、手近な手法として振り返り記述の欄に**【１　自分の考えを深めたり、こだわって追究したりしたことは何ですか？】**と**【２　自分から準備や学び方を工夫したことは何ですか？】**の設問を用意する。タネ（評価規準）を見せたら、生徒が「意識して応えようとする可能性」があるが、教師が何を望んでいるかを悟られることはマイナスにはならない。「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、**「１　粘り強く取り組む力」**と**「２　学びを調整する力」**で見取るから、「先生が気に入るような取り組みに寄せ」てよい評価を得たとしても、教師の期待に対して生徒が現に実施し達成できたのならば、そのとおりに評価すればよい。ただし、探究の過程で得る気付きや自主的な創意工夫を「評定」に落とし込もうとするあまり、その材料集めにばかり奔走してしまうと、本来の自由な学びを阻害するばかりか、評価疲れに陥り授業改善からも遠のいてしまうので注意を要する。

7 “○○教育”はふだんの授業で実践できる！

最後に、探究学習の持つ価値について触れておきたい。昨今、地歴・公民科の教員に求められる役回りが増えており、道徳教育や金融教育といった“○○教育”がそれに当たる。実社会を扱う教科であるため、私たちがその旗振り役を期待されるのはある意味当然だ。

けれども、あれもこれもを担うには限界もある。私は常々、「○○教育は授業でできる」と確信している。キャリア教育はインターンシップで、人権教育は外部講師の講話でしかできないわけではない。例えば、主権者教育は、選挙制度の歴史を教えたり、投票のしくみを紹介したりする中で、国民主権の意義や一票の重みを理解させることが一見近道に思える。だが、そのために十分な時間を確保するのは難しいし、生徒の反応もよろしくない。私はむしろ、社会へのリアルな関心を高めれば高めるほど、一票を行使したくなる気持ちが増幅されるのだと思う。教室と世の中をつなぐ学びこそが、政治に無関心でいられない主権者を育て、投票所へと足を運ばせることになる。

＊『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 高等学校 公民』

写真 探究型授業の風景
「倫理」の授業でフリップ発表をしているところ

そこで効果的なのは、毎日の授業や清掃といった学校の諸活動への「意味づけ」だ。「これをするのは将来こういう意味があるんだよ」と１分もかからない理由づけを与える。何をするでも、それをする理由をきちんと知らせる、これをマイクロ・インサーション（たった少しの意味づけ）とよぶ。およそ○○教育はどの授業でもできるばかりか、生徒の学ぶ意欲を維持するために必要な営みだ。その積み重ねこそが、生徒を主権者に育て、賢い消費者にしていく。探究学習が目指すゴールは、覚えてもすぐに忘れ去られるような“指先までのアウトプット知識”ではなく、卒業しても社会人になっても生き続けるスキルを身につけることだから、根拠を基に自分の考えを説明したり、他者と意見の折り合いをつけたりして、発表が終わってからも次の課題へと継続性を持たせうる、オープンエンドの学びにしていく必要がある。

探究学習は知識・技能の定着を妨げないこと、受験にも有効で、生涯使えるスキルにつながること、生徒の主体性も協働性も高めること、学習評価も行いやすいこと、学校に求められるさまざまな教育活動を同時に展開できる可能性があることなど、そのメリットの大きさを改めて強調しておきたい。そして教師であっても“生涯学び続けることの大切さ”を「生徒と共に学ぶ／生徒から学ぶ」スタイルで伝えていきたい。